

も大夜御迷惑な筆柄を書いた様な気がするが、従来の御厚情にすがって御海容廣く様
察下り御願ひして欄筆する。

(昭和四十一年十月中旬)

丹後・中丹地域の 古式古墳について

岩田 実

一、序

何処へ行つても、世間一般の人は、一つの古い遺蹟がみつかる、と、狼狽閉鎖的にその地域こそが文化の中心であったように、お国自慢の理解をしたがるものだ。又、それぞれ地域の地方史研究の方々は、さすがに、出来るだけ冷静に事実を把握されようとなさるのだが、地方史記述の段になる

と、古代史の材料難に困られ、苦心慘澹のあげく、中央との結び付きとして、準據されるのは、止むを得ずであろうが、古事記、書紀の記載をそのまま利用されてしまうように思う。又、その際実年代すらも、そのまま検討がなされていないように思う。中央史に於ては、古事記・書紀の記事は八世紀になつてから記述されたもので、こ

の伝承の批判は、早くも明治の那珂通世氏に始まり、白鳥庫吉、津田左右吉氏等、本格的な文獻批判が始まつて信用を失い、戦後の古代史は、大陸文献の裏うちのある資料に限られてしまつて、六、七世紀以前のことは抹殺されてしまつていくように思う。この空白をうすめる為、考古学方面からも史実としての資料を検討しようとしている。だから、只今のような書紀の理解の仕方には、数々の疑問をもつものである。そうはいつても、戦後の考古学ブームで数々の発見はあつたけれど、史実として、それが絶対年代と結び付くには到つていない。基本的な古墳期がいつ頃始まつたかについて、考古学の方としては、三世紀半より四世紀と巾を持たせざるを得ないのである。で今、私が固定しない知識であると認めつつ改めて、この問題にとりくもうとする問題点は、一般に丹後、中丹地方の古墳を直ちに記述に結び付けようとする行き方に疑問をもつて、次に全国的な古墳満年からみてどういふ位置にあるのかを確かめてみたい。

本地域の考古学的な調査発見は既に大正の初年より、京都府史蹟勝地調査会委員の

方々、中でも、京大に居られ、長らく委員として活動された梅原末治氏によつて報告されたものがほとんどで、すべて「京都府史蹟勝地調査報告」(以下、史蹟報告という)として刊行されている。然し、もうすでにあらかた散逸して一般的には、読めなくなつてしまつている。この際許される限り要約して紹介したい。以上が私の小論の目的である。

この論を起すに当つて最も一般的に関心のありそうな一つの題に結び付けて考へて行きたい。

二、奥丹後地方はたして古代文化の中心であったか。

(イ) 古墳時代以前

世間では、熊野、竹野の両郡には縄文、弥生期の遺蹟として府下の広大な遺蹟が認められていること、仕大な古式古墳を築き付けて、大陸と直接關係をもつ一大文化圏を想像したり、出雲文化圏に入る特殊な文化地帯とかいうように考へる傾向があるようだが、小生は疑問に思つたしかに函石遺蹟は、明治二十九年頃より中央学界に伝えられ、中でも王塚の

寶泉(弥生中期に当り紀元6-25年)を発見したことは、戦前の研究で弥生期を奥年代に結びつける重大な発見であつた。又、「此処は縄文、弥生期以降古墳期奈良、平安一戦国頃まで数千年の尸史の集積地として、府下でも重要な遺蹟である」とされた梅原末治氏の言(史蹟報告第一冊)は今も変りがない。又戦後決詔海岸(栗山遺蹟)、網野八丁次(宮の下遺蹟)などで縄文期居住跡、縄文弥生期の土器の発見されたことも、重要な遺蹟である。しかし、この期の調査は、高坂古墳以上に発見困難で、目下の処の発見は局部的なものに過ぎず、まだまだどんな山岳地から、どんなものがどびだすかわからないのが、全国的な段階である。寶泉の発見とか、宮津地方日置の石剣発見(史蹟報告第四冊)とか、断片的な発見から、此の地が確かに弥生期に於て、九州地域の占めていたような、大陸と直接交渉をもつ特殊な文化圏を造つていたという、実証に発展さす為には、他に多くの白銅鏡とか銅剣の出土等、大陸渡来の諸物件を築めて、他地域に見られない確たる特色をつきつけねばなるまい。

地域の弥生期を示す石斧、土器類の分布は丹波、丹後を通じてかなり多く、表面からながめる限り決して竹野、熊野の海岸が特殊なものでない。それではせめて、奥丹海岸が当地域の弥生文化の中心であつたことを実証せよとするならば、今発見されている分布についてだけなら、今発見されている分佈について比較検討がなされた後、奥丹海岸の性格付がなされるべきである。

(ロ) 古墳時代

丹波丹後を見渡して、これまで調査された限りに於て最も古式と考えられるものは、丹型石棺出土の加悦町蛭子山古墳、丹後町神明山古墳、それに網野町銚子山古墳である(この二看前後不詳)。

続いて、組み合わせ式長持型石棺出土の丹後町産土山古墳、前後して蛭子山に接近する加悦町の作り山古墳、舞鶴市伊佐津の切り山古墳、これも組み合わせ式石棺である。外に綾都市多田町の聖塚、あやめ塚の両方墳が古式を止めていたと推定される。

以上八基は、一応五世紀末、六世紀初頃までのものと考へたい。

これらの内にも、調査時既に荒されてい

な姿を蛭子山に発見することになるのだが、報告書を読むものは、先ず、中央地域での様相と共に、付近との関連を念頭にしないでならぬ。

又、調査者が、さかんに「日葉酢媛陵と同じものだ」を、連続されるが、これは古墳全体の比較をされているのではなく、埴輪そのものの比較と受け取るべきで、墳そのものの年代推定には、参考以上にはとりあげない方がよい。なぜなら、「墳」形成の年代推定に当つては、個々の副葬品の上限をとりあげるべきでなく、下限をこそとりあげるべきであるからである。神明山の模造品は、古式の典型的な石臼、石杵のような石製品ではなく、五世紀にも盛行した石製模造品の祭器的な感じがある。

以上私は二墳の示す性格はほぼ、中期の様相を示すものである点を述べた。

そこで、基準とするものが、地方に伝わったと考える時、基準に先行することは考えられないから、中央で完成させてから、十年とか、二十年の経過が考えられる。しかし、取り入れようとする「地

方人」にあつては、「その時代の最新のものを得よう」と心懸けるだろう点からすれば、年代経過はあまり考慮しなくてもよいということにもなる。(奥州平泉にあつては、中央部からさ程遠くない。結局は、その地域に、「中央の文物を受け入れる基盤が出来上つてたかどうか」ということの方が問題となつてくる。この点、すでに蛭子山を完成させていた当地域にあつては、時間差の問題はさして気にする必要もあるまいと考えられる。よつて五世紀前半の終る頃までには、ほぼ完成を見ていたと考える。

この推論に立てば、奥丹三郡の古墳期は、これ以上に古い前期型式の墳丘の発見されない限り、中期型の古墳を以つて始まるということになる。こゝに文献史学との大きな開きを生じる問題が生れる。

小生は先ず地方史に於て、書紀の年紀をそのまま借用される方法には非常な抵抗を感じる。次に笠井氏等の修正年代を借用なさる

場合は、はたして、イクメイリヒコイサチ(垂仁)の段の竹野媛その他の伝承の成立する基盤が、竹野地方に存在するかどうか、この点、奈良地域に崇神、景行陵伝の前方後円墳が存在するが、形状として疑わしいと考えられるので、中央史からの問題とならう。将来の問題である。

(C) 蛭子山古墳(加悦町加悦) 昭和四年発掘調査、明石の地内にあつて、標高三〇米の丘腹上にあり、加悦盆地を一時の内に収めることの出来る位置にある。天然の丘を利用して、平地に比べると、不整で地山との接合点高低差を生じ、正しい基底面の測定が困難であるが、ほぼ三段の段築が認められる。方部の前部は、地山との接合地で、径百米、前方の高さ約十米、後円の高さ十四米もあり、竹野の二墳に匹敵する規模を有す。

墳丘の外部構造

遺物について

(1) 棺内……内行花紋鏡、一面

鉄刀、一口

(2) 棺外……鉄刀、七口、劍身、断片

十個、短劍身、十二口、

鉄鍔、二十余個、

斧頭、四口、

以上の事柄についての知見

① 玉類、装身具等を欠くのは、一度盗掘に会つていた事実のあること。

② 内行花紋鏡。「鏡面は三寸(約十五厘)、厚二分あり、鏡背文は剣をめぐつて四葉座があり、四葉座の間に「長宣子孫」の銘を配し、それと一箇を距つて八羽文を置く……(中略)……中国鏡に多い内行花紋鏡の標式的なものであり、其の時代は漢代に属する。ただ本例は着るしく磨滅して、銘文や内区などは殆んど見分け難いまでに模湖たるものとなつてゐる。一応仿製品ではないかと疑ふものだが、調査者の観察は「構図の均正、銅質の佳良さ」をあげて舶載品であると断定してゐる。更に「鈕孔の磨滅」と合わせて「伝世鏡である」としたことは、すこぶ

る重大な事項である。

③ 短身剣のうち九口は、讃岐石清水山猫塚古墳(二期型)と見る人も、二期とみる人もある。梅原未治「讃岐国高松市外石清水山猫塚古墳」に全く同一の剣であるが、それは銅製品であり、これは鉄剣である。

④ 鍔は鉄製で、(1)有基定角型と、(2)柳葉型の二種がある。しかし、通例この種のもものは、銅鍔であつて、これが本墳副葬品の大きな特徴であること。

○資料(史蹟報告)第十二冊(十四冊) 主体に過去の盗掘の跡をどめ、点晴を欠くのをまめがれぬとしても、此処に始めて、本格的に、丹後地方の古式の制が、その一端を露わし、しかも今日、文化財保護課が次第に精査に及んでおられる有力な一つの基準となつてゐるもので、誠に貴重な調査であつた。

報告書の内容の中、以下の事項は二期型の特色を示すものとして、注目すべきことだと思ふ。

1. 先ず古墳の占地状況であるが、竹野地方の二墳が、平野内に位置を占めてゐるのに対し、此の墳は自然丘の上にあつてそれを加工して営まれてゐる。前期型前

埴輪円筒列は、方部の正面、中段と上段に夫々一列に認められ、他に後円部のほぼ中央に主体である石棺を繞つて、縦五米七二、横四米八四内外の矩形に配列されてゐたこと、更に、棺の左右に家型と、蓋型の異形樹物の存在が認められた。このような例は、日葉酢媛陵以外には見なかつたと述べてゐる。又、「埴輪方型配列の内側は、即ち墓壇にして、堅穴式に属し、深さ六尺(一米八〇)にして底には、一面に礫石を敷き詰めたり、此の内側中央に於て、石棺は其の主軸を南北線より30°偏して安置さる」と、棺の安置について特殊の構造を指し示して、棺の周囲に柳と考へられるものの存在を暗示してゐる。

主体について

主体は花崗岩質の船形石棺である。石材の総長は、九尺(二米七三)を超え、巾は約九十六厘、他端に向つて細くなつてゐる。前後の両端に蓋身共に夫々綱掛け突起がある。これは、身部には一個、蓋部には二個ある。棺の身部の内側には、遺骸を入れる長さ六尺余、巾二尺近いくり抜きの中に、造り付け石枕をもつ。

方後円墳はこのように自然の地形を利用して、丘陵の先端や、尾根の頂上に占められていたよって前着に見られた墓が存在しない。(報告書中墓の存在も考えられないことなどについておられるが、小生は地型上無理だと考える)

例、○相楽郡出城・椿井大塚山古墳 ○乙訓郡乙訓村長法寺南原古墳

乙墳の形状であるが、自然丘を加工して、平地に、自由に造形した三級築のようにはいかない。前方後円の形状も、等高線を見ると、なんと小型を整えた感じがする。方部の前部の狭いのは、前期型に似ているということが出来る。

3. 主体の方向について
本墳の主体は主軸と直角をなす方向に存在したが、四世紀前半に中心をもつ二期の多くは、やはり主軸と直交した長い堅穴式石室が設けられたと推定されている。円筒道輪や、形象道輪の起源も、この時期の中途に発生しているとする説もある。(小林行雄「古墳の変遷」『世界考古学大系 日本Ⅲ P.37』)

4. 廻で、調査者の述べている「後円頂部に、主体を巡って、長方形に円筒列を配

置し、その内側に冢型道輪を樹立させる形式」は、最初、日葉酢媛陵で発見され、続いて、この塩子山で再度確められたもののようである。

昭和初期の調査記録の蓄積が何よりの推進であった当時、古式の事例として貴重な資料であった。今日では、かなりその説明が加えられ、奈良県日葉酢媛陵、奈良県山古墳、三重県石山古墳、大阪府豊後山古墳、岡山県金蔵山古墳などで発見されているように、上田舒氏によれば「その源流は、奈良県茶臼山古墳の後円頂部に土師器の壺が三十数個、整然と石室を囲んで方形に据えられ、道輪の概があるのが、この最も古い形ではないだろうか」と推測されている。上田舒「道輪の諸問題」

世界考古学大系 日本Ⅲ P.158 P.159

しかし、又一方、第一期でも、最も古い形式と考えられるものでは、道輪列が発見されていないのである。(長方寺南原古墳(史蹟報告第十七冊)梅原未治)

5. 副葬品について、有蓋定角型、柳葉型、鉄鍬は、柳葉型が、南原古墳で発見されているし、銅鍬であった石清尾山猫塚古

墳など、この例だけから見ると、前期型を考えられる。更に、長年の伝世をしのばせる長宜子孫銘内行花紋の漢式鏡は、非常にこの墳の古式を思わせる。

以上盗掘で大切な箇所を欠きながらも、④項を除き、全国的な傾向から、本墳のもっているその二期古墳的性格と考えられる要素を拾いあげた。

しかし、主体を葬った石棺を中心とする内部構造に於て、④項に加えて、一つ重大な時代のくい違いを発見する。

それは、本墳の主体が、船型石棺であること、それが三重県、石山古墳の葬花形式を含む粘土槨構造に、極めて接近しているものを感じるのである。(後述の理由で四世紀後半)

先ず舟型石棺というのは、普通は長持型石棺と共に、五世紀に盛行するものとされていることである。形式的にはそれは、堅穴石室と共に現われる割竹形石棺(例、香川具美山古墳(舟型石棺))から変化したものとされているので、極めて、二期的性格の目立つものである。(後述の論議に再度触れる)

次に三重県石山古墳の粘土槨であるが、それは、前述の如く、後円部の中心に主体が自立してくる。四示すると、

Ⅰ期の中途より、割竹木槨を石室で覆わず、粘土で包んで土をかけたもの、又、その木槨を割竹型石棺に変えて、堅穴で覆う形式が自立してくる。四示すると、

① 堅穴石室+割竹木槨

② 粘土槨+割竹木槨

③ 堅穴石室+割竹石棺

こういう推移からすれば、塩子山の構造は、第2次の変化の①割竹型木槨を、石棺に代えてた形式と考えることが出来ないだろう。そうすると、本墳の形式は単純に、粘土槨構造と石棺を折衷した形式と考えられるし、又粘土槨構造は、或る時代を特色づける一つの型であつて、その型の中に、次の新しい石棺という要素をとり込んだ新しい一つの型だとも解釈できる。これの解釈に当つては、墳丘の外部葬形形式が、古式であることに鑑み、折衷式のものと考えたい。時代は下らないと考える。

尚、これを舟型石棺と合わせ考えたい。香川具美山古墳は、典型的な割竹型石棺を三個も出土したことで有名であるが、1号石棺は、堅穴形式の石室から、3号石棺は粘土に包まれていたようである。(四解考古学叢

の槨を囲んで、長方形に道輪円筒をたて並べた。その道輪の内側は土坑になっていて三つの木槨を粘土で包む粘土槨が存在した。その粘土槨と土坑の間には、礫石がみぞ状につめられていた。この構造については府下では、日向町、妙見山古墳前方部でこの構造の調査の際、くわしく説明が加えられている。(史蹟報告 21冊 梅原未治 妙見山古墳)報告書によれば、本墳の主体を囲む道輪円筒の内側も全体が土坑になっており、ただ木槨を石棺に代えていた。私は、その構造が、「粘土槨構造に関連する構造」ではなかったかと推測するものである。ここで少し詳しくは、後程梅原未治氏の「存在を推定」された、石棺付近の特殊な構造部を調査の際、発見者は意識せず、ただ「底には一面に礫石を敷きつめたり」とのみ、記していることである。報告書には、その礫石がどういう性格のものであつたのか追求はなされていない。その礫石は、石棺の下部に数個四示されたもののみからは、棺を安定させたためのものと解釈されるが、はたしてそれで良いのかどうか、それは石棺底面からある範囲だけに敷かれていたものが、断面図をとるとどういうものか、説明

されていない。元来、古式の埋蔵構造というものは、先ず土内に土坑を作り、U字型棺台の上に、木槨を据え、割石で槨を作ったのが堅穴石室で、同じく土坑を掘下げて石を積まず、そのまま粘土で木槨を固めたのが、粘土槨の構造であるといわれる。今正にかような構造の中に、石棺底面の礫層を発見しているのである。これより後代と考える産土山古墳(舟後町宮)の長持型石棺出土の際には、土坑内に礫層等認めないないので、やはり、これは特殊な設備と見るべきであろう。しかし、報告書は注意して読んでも、石棺自体を粘土槨で包んだ形跡はない。詳細は不明だが、この現象は、木槨を石棺に代えたことから、おそらく粘土槨構造に何等かの変形がなされたものと推測するのである。

この際、この現象を単に粘土槨とか、舟型石棺とか、ばらばらのものと見ないで、むしろ総合的に追求して見たい。

第一期の典型的な埋蔵施設というのは、本来、長法寺南原古墳、椿井大塚山古墳の例に見る割竹型木槨を、割石積み堅穴石室で覆ったものであつたといわれる。廻が

水野・小林・創元社

普通本墳のような「舟型石棺」は、この「割竹型石棺」の次に、「長持型石棺」と共に盛行すると考えられているようである。私はここで盛行時を問題とするのではなく、出現時を問題としたい。

で、石棺の形式変化は、原型を「割竹型木棺」とした場合、それをそのまま型つた「割竹型石棺」を以ってやはり最初の型式としなくてはなるまい。次の変化は横にやや小さくみを持たせ、底部をけずつて、棺の安定をはかる変型が加えられた「割竹型舟型」が考えられる。この二者は外形だけでなく、内部も同じ割板型という共通点があり、同系統のものと考えられる。しかし、長持型はこれとは別の、組合わせというアイデアから来ているもので、盛行時が同じでも、発生が同じであるとは決るまい。

で本墳舟型石棺は、特に外部内部の葬祀形式、出土品の内容から見て、かの快天山古墳の三個の割竹型石棺の時代に降るとは考えられない。割竹型石棺から、舟型石棺への変化には、そんなに時間的な経過を多くする必要もないのではないだろうか。

結論として、本舟型石棺は、梅原末治氏の

一 ことがある。

(D) 長宣子孫内行花紋鏡が伝世鏡であることの重大さについて

唯一面、発見された鏡であり、発見時五片に砕けていたのであるが、(蓋棺の際扱ったものであろうといわれる) 鈕孔にも、背文にも、着るしい使用すれがあり伝世鏡であるという。

問題の鏡の背文は、八弘文の内行花紋が主であるが、銘文帯がなく、口中央の四葉の間に、「長宣子孫」の四文字の銘があるというのだから、この説明からは、後漢鏡とうけとれる。

後漢鏡の製作は、後漢代といわれるのでこれは銅鏡の中でも、我が国に多い三角縁神獸鏡(魏の代の製作といわれる)よりも製作年代もその渡来もずつと古いと考えられる。景初三年頃の卑弥呼の話を通じて欲しい。

伝世鏡については、梅原末治氏の研究がある。

「伝世鏡と呼ばれるものは、後代の魏晉鏡等と共に、我が国に輸入されたものではなく、古く輸入されて以来、わが国にあつて、永く伝世されたものである」

言う通り、大和日葉酢媛陵型の古式の葬祀形式を墳上にとどめ、内部土坑内に粘土槨構造を変型させたと思われる内に発見したものである。

本墳には前期的な要素が多すぎて、どうしても時代を下げるわけにはゆかない。前期に連なる時代を考へなければならぬわけである。

本墳は、主体や出土品の豊富さこそ違え、外部の形状、葦石、主体をめぐる埴輪の並び方の形式、前部粘土槨構造の変形と考えられる構造、前期に連なる内容の副葬品等、最も似かよっていると考えられるが、三重県石山古墳の形式なのである。

小林行雄氏は、この三重県石山古墳の形式をもつて、四世紀後半の代表的なものとしておられる。(「四世紀後半の古墳」水野・創元社) この点から、その時的傾向を示す時期に出現したとする。

かくの如く、本墳は、先にあげた工期的性格もある中に、主体構造に於て、ヤツ時代の下ったものを発見し、四世紀後半の頃と判定する。同時に本墳に於ける内容は、近畿諸地域と密接な関係があり、決して、地

(梅原末治 上代古墳出土の古鏡について)

そしてこの鏡が、魏晉鏡と共に古墳に副葬されている事例をみると、新しい鏡が棺外にある場合は、その伝世鏡は、棺内の遺物の傍らに、棺側にある場合は、枕頭にあつて区別されていたであろう。(小林行雄 古墳時代の研究) 本墳の場合は、五片に砕けて、石枕の上からその下辺に散つていたので、この説に合力を与え得ない。

伝世される鏡は神宝であつた。呪術のこもつた聖宝であつた。しかもその宝器の伝世を断つに到つた事情について、小林行雄氏は、「かれらは伝世の宝器を保持し続けたある司祭的首長の死にあつて、この首長の存在をより高めるためにはじめて古墳を作り、しかも宝器の伝世を絶つてこれを副葬品のつちに加えることに依つて、聖性の根元を断つた。なぜなら、死者に代つて、あらたにその地位につくべき、首長にとつては、もはやそのような古い形の付与によつて、その權威が保証されねばならない必要がなくなつていたからであらう」。又、こつてもいつている、「先代に代わつて、あらたに首

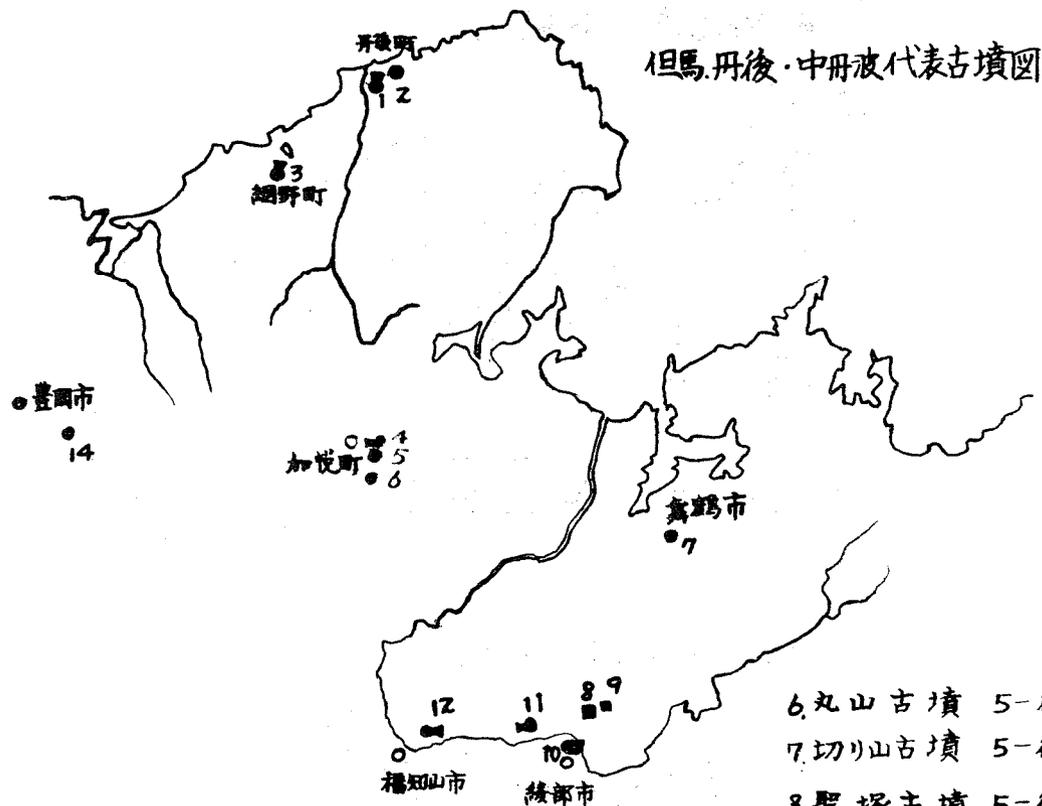
域的なすれを感じさせないことである。

最初、予定した八基に渡つてその古式の状を述べるともりでいたが、紙数の都合で最も目を引く大形古墳の終つた所で一応、区切りをつけて結論に結ぶ。

三、結びに代えて——諸古墳の関係

(A) 結局、丹後地域で、最も古いと考えられる要素を持つものは、今迄の処、加悦谷に見られる蛭子山古墳で、先ず四世紀後半、神明山、銚子山は共に内容物を欠くので、占地及び形状の判断からだが、五世紀中葉までの間としたい。

他にこれに比肩し得る古墳は、今迄の処奥丹、中丹には発見されないで、古墳期の始まりは、加悦谷と、五世紀型古墳が、こつ然として出現する竹野を中心とした奥丹三郡にあつたとしてよいであらう。この両地域は、どういふ関係にあつたであらうか。この両地域には、互いにそれに次ぐ産土山古墳、及びこれに次ぐものと、作り山古墳以下につぐ古墳群がそれぞれに一応分布を形成しつつ五世紀末に及んでいると考えられる。しかし、これについては、単純に始末がつかない



但馬丹後・中丹波代表古墳図

- | | | | |
|---------|-----|-----------|-----|
| 1 神明山古墳 | 5-前 | 6 丸山古墳 | 5-後 |
| 2 産土山古墳 | 5-後 | 7 切り山古墳 | 5-後 |
| 3 銚子山古墳 | 5-前 | 8 聖塚古墳 | 5-後 |
| 4 蛭子山古墳 | 4-後 | 9 あやめ塚古墳 | 5-後 |
| 5 作り山古墳 | 5-後 | 10 青野大塚古墳 | 不詳 |
| | | 11 刀根山古墳 | 不詳 |
| | | 12 稲葉山古墳 | 6 |
| | | 13 親玉塚古墳 | 4 |
| | | 14 森尾古墳 | 4 |

存在しないとなれば……… 分布の上から神明山古墳、銚子山古墳（この場合、前後は不明）の被葬者こそ、正に該当するはずである。しかし、この意味は必ずしも、加悦の部族が五世紀前半の頃竹野地方に進出したとばかりいうのではない。既に加悦に葬られた部族の首長は、興丹三郡と、与謝郡くらいまでの部族全部から、擁立されていたかも知れない。十分に連合体的な地位だからである。

これには、隣接している但馬地方とか、氷上郡との関連を考えると一層興味深い。但馬地方で最も古式と注目されているものに、豊岡市森尾の森尾古墳がある。又、氷上町北野にある親玉塚古墳があつて、それぞれ古鏡を出し、前期制をとどめていとされる。へ親玉塚は内容にいがわしいものあり。これらの鏡は今小林行雄氏によつて、全国的範囲をもつて、同鏡鏡の研究対象になつていよう重要な遺跡である。しかし、これらはいずれも漢式の伝世鏡でなくて、魏より多数移馬台園に贈られた三角縁神獸鏡である。だから、年代は同じように古くとも、今問題にしている司祭的性格のものでなく、何等

か大和の勢力との結び付きを考えさせる鏡なのである。しかも、森尾古墳は、其の規模、南北径九米、東西径六米、高さ二米の小型円墳であり、親玉塚古墳は直径十三米、高さ五米余の小墳丘であつて、こちらから影響を及ぼすことはあつても、影響を受けるような強大なものは見当らない。墳の大きさは、人民を支配し得た勢力の大きさによるものであろう。しかし、これを以つても、加悦谷から、直ちに神明、銚子山被葬者になつたとは言えない。即ち、たとい神明山、銚子山の王が、蛭子山被葬者を葬つたとしても、彼等は必ずしも、当地域の部族間から現われたとはいへない。この部分だけは保留しなくてはならない。あるいは、神明山、銚子山の支配者は、大和の勢力であつて、これによつて、圧服された歴史が物語られているとも考えられるからである。

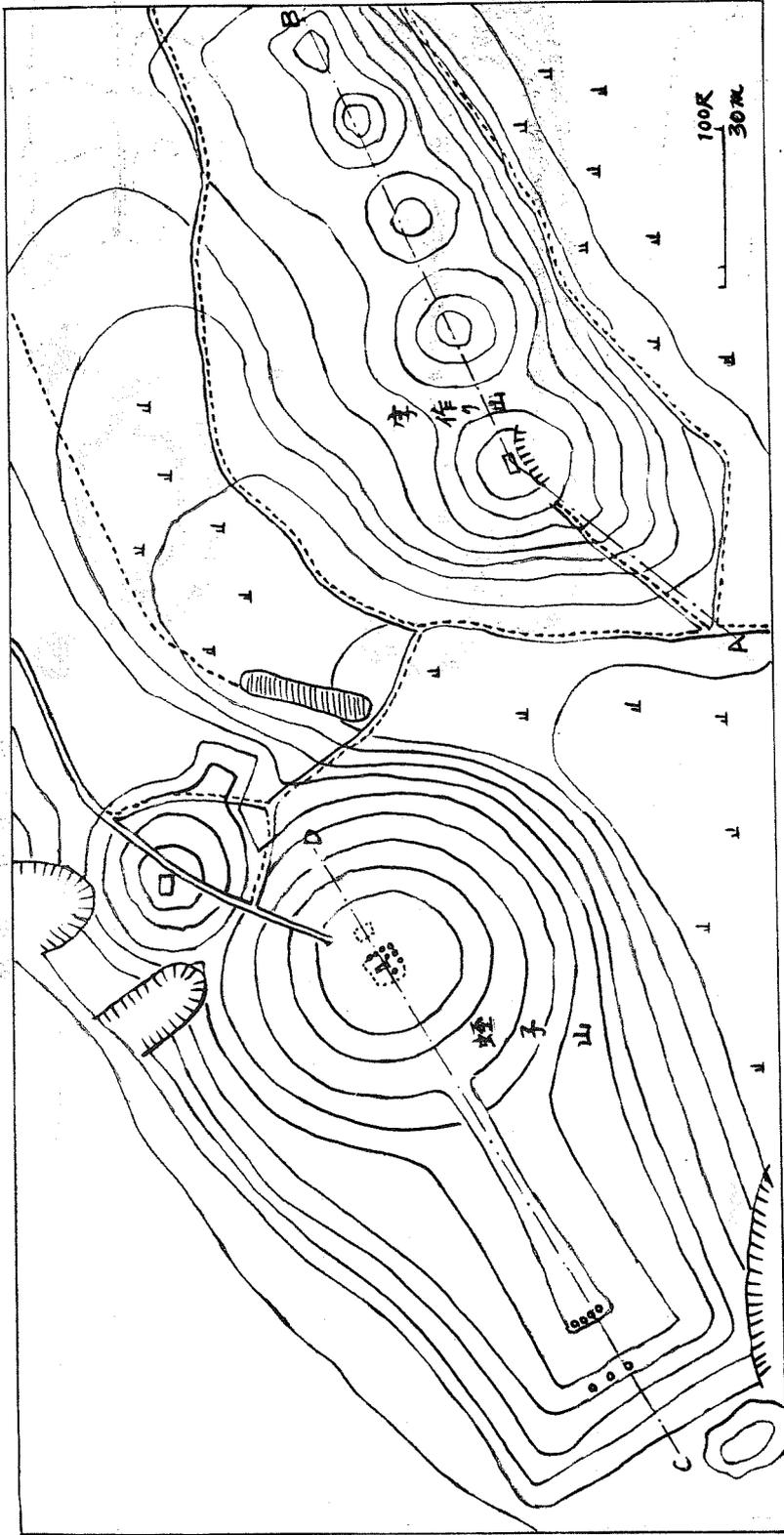
不気味にも、五世紀前半の頃、加悦谷作里山古墳の隣に丸山古墳があらわれ、他の副葬品は欠くが、三角縁神獸鏡（破片径22.2cm）と方格規矩形鉄文鏡を出す。侵入的勢力であつたが、発展的勢力であつたかは、たとえ西墳が、その内容を蔵していたとしても、解夫は困難であろう。まして、欠失した今では、どうにもならない問題である。

しかし、最初の本論に返つて、伝世鏡の埋蔵された時期が更に五世紀初頭にまで降るものであつたとしても、又、述べれより更に古式があつたとしても、述べたつた如く、それまでは、神を祭るために伝世することを必要とされた宝鏡がその時点を以つて最後の司祭者と共に終つたことを意味すると共に、後継者は、呪術を必要としない権威者に代つたといふことである。今、それだけの勢力が象徴されている事を許すものは、当地域にあつては、神明山、銚子山以外に見出されない。

蛭子山の司祭者の前期性に、終焉を与えたものは、神明山、銚子山の支配者である。誠に、蛭子山、神明山、銚子山古墳は、山陰道にあつて、四世紀後半から、五世紀半に至る雄圖を形成している。

せつかな推定は物笑いになるが、地

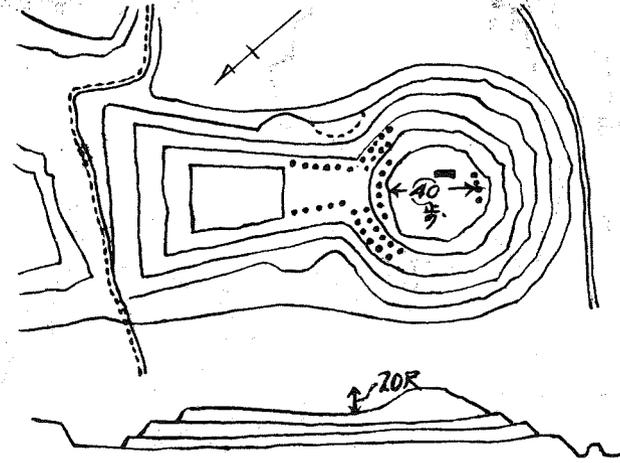
煙子山·作山古墳附近圖



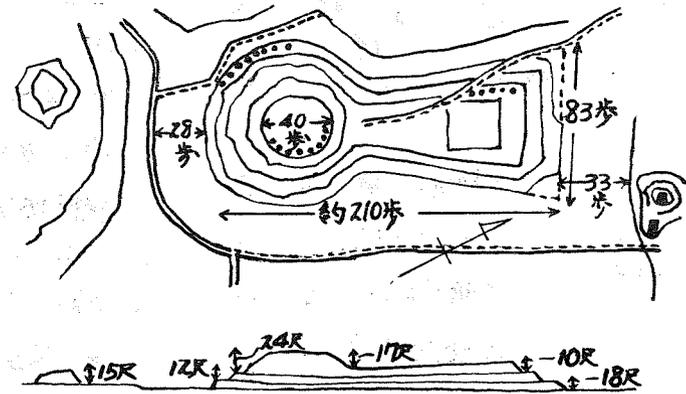
AB断面

CD断面

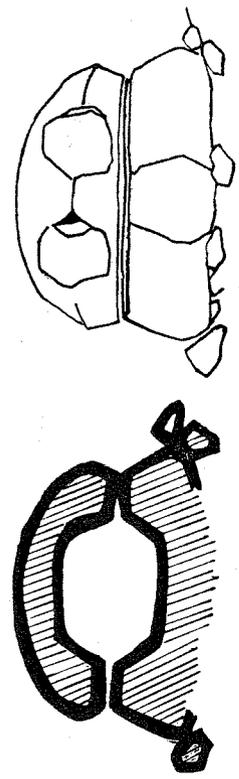
神明山古墳形状略圖



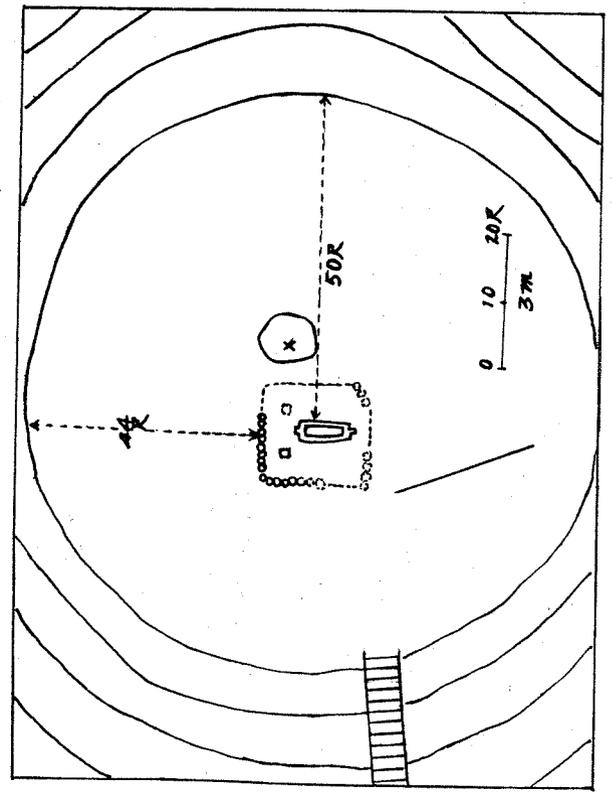
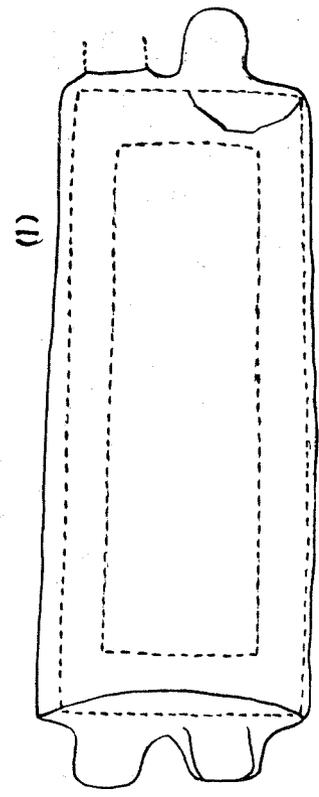
鉾子山古墳形状圖



2m
1
0



船型石棺実測図



姫子山古墳後田上部に於ける埴輪田筒列と石棺

方史考古学も、個々の調査と共に、専門家の調査も確かめ、今布的なところを、個々の関連的なところを考えてよいの

ではないか。
昭和四十一年八月廿日稿了

野玄三氏にお願いして承諾を得た。

例会だより

四月五日 西国書館
「西丹地方史」誌編集会議、本年度、上記会議の編集、発行を担当するに当たって、西丹地方史研究者協議会加盟団体代表者の参集を願って意見交換をし、編集方針を決定した。
七月二十三日 西国書館
市文化財保護委員会の活動状況、阿良須神社の中世史料について（井上氏）。「舞鶴地方史」誌第四号の報筆依頼。
十月二十二日 西国書館
西丹地方史研究者発表大会の準備打合せ。なお、石大会での発表者に川端、瀬戸西氏を決定。丹後郷土史料集の続刊につ

いて（中嶋氏）。
市内区有文書の保管方法について（真下）

雑報

○糸井文庫所収文書の保存方法改善について、当研究会は、昨秋、市当局に要請したのであるが、その結果、今度保管用トタン箱が多数購入され、保存に万全を期すことになった。
○「西丹地方史」誌第五号を七月二十五日に発行した。
○本年度西丹地方史研究者発表大会は、十一月十三日（午前十時～午後四時）西舞鶴高校で開催される。なお、大会での講演を府文化財保護課記念物係長の中

編集後記

○舞鶴地方史研究会の誇りとする大先輩であるだけでなく、西丹地方の文化的指導者たる池田儀一郎先生の喜寿を記念して、倉籍な特集号ながら編集し得たことを、当研究会は読者の皆様と共に喜びたいと思えます。先生には、益々御健勝で、今後とも多方面にわたる御活躍を期待してやみません。
○池田先生の御終歴をおうかがいしました。略年譜をいただきましたので、これをそのまま掲載しました。
○井上氏より、池田先生のお入柄の一面面を簡潔にまとめた一文を得ました。文中には、我々がはじめて知ったいくつかの事実も記されており、池田先生の略年譜と共に、将来、地方史研究上の一史料になることと思えます。